

チュルク語複数接辞の非複数用法：* 連合・近似・等位接続

江畑 冬生
(新潟大学)

Non-plural Use of the Turkic Plural Suffixes: Associative, Approximation, and Coordination

EBATA, Fuyuki
Niigata University

The plural suffixes in Turkic languages have several types of non-plural function such as associative and approximation. In South Altay, for example, *aka-m-lar* denotes an associative meaning ‘my brother and his family.’ Another non-plural use of the Turkic plural is approximation such as *bura-lar-da* ‘around here’ in Turkish. In addition, some languages like Uzbek and Modern Uyghur have an honorific use. Interestingly, although these non-plural functions of the plural suffix are widely found in most languages of the Southwest, Northwest, and Southeast subgroups of Turkic, they are not observed in languages of the Northeast subgroup. Instead, the plural suffix of Tyvan, a language of the Northeast subgroup, has temporal adverbial function when accompanied with an accusative suffix. The so-called coordinative accusative of Sakha, that historically developed from the plural and accusative combination, also has the temporal adverbial function. The Turkic plural suffix can be used for forming a coordinate structure. There are two types of coordinate structures with a plural suffix: one is simple type found in Kyrgyz and Salar and the other is analytic one widely found in languages including the Northeast subgroup. These two types of coordinative function are apparently similar to, but different from, the so-called group inflexion found in Turkish and other languages. No Northeast languages exhibit the coordinate structure of simple type or group inflexion using a plural suffix. Such a distribution of non-plural function may be counted as one of the few linguistic features common only to the Northeast subgroup.

江畑冬生. 2024. 「チュルク語複数接辞の非複数用法：連合・近似・等位接続」. 児倉徳和・佐藤久美子（編）. 『チュルク語文法の諸相 2：情報構造・知識管理』. pp.1–18. <https://doi.org/10.15026/0002000296>



本著作物はCreative Commons Attribution 4.0 International Licenseの下に提供されています。
<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>

* 本研究は、科研費（課題番号20H01258, 21H04346, 22H00657）の支援を受けている。サハ語・トゥバ語・ハカス語の例文は、筆者が実施したフィールドワークまたは筆者の作成したコーパス資料から得られたものである。本稿の内容は、日本北方言語学会第5回大会（2022年11月26日・静岡大学）および東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所の共同利用・共同研究課題「チュルク諸語における情報構造と知識管理—音韻・形態統語・意味のインターフェイサー—」2022年度第3回研究会（2023年3月4日・東京外国語大学AA研）での口頭発表に基づいている。2名の匿名の査読者から極めて有益なコメントがあったことに感謝申し上げます。

キーワード：チュルク諸語，複数接辞，系統分類，等位接続，時間副詞

Keywords: Turkic, Plural suffix, Subclassification, Coordination, Temporal adverb

1. はじめに
2. 背景：チュルク語の下位分類
3. 複数接辞の非複数用法：連合・近似・敬意
4. 複数接辞の等位接続用法と **group inflexion**
5. トゥバ語複数接辞の時間副詞用法
6. サハ語集合対格接辞との対照
7. 類型論的事実と通時的変遷に関する仮説
8. まとめ

1. はじめに

本稿では、チュルク語複数接辞-*ler* の非複数用法が同系言語の間でどのように分布しているのかについて検討する。北東語群以外では、非複数用法として連合・近似・敬意の用法が見られる。加えて、複数接辞を用いた **group inflexion** も可能である。一方、北東語群にはこれらの用法が見られない代わりに、時間副詞用法がある。複数接辞を用いた等位構造のタイプも、北東語群とそれ以外とで異なっている。このような非複数用法の分布は、北東語群のみに共通の言語特徴の1つとして数えられる可能性がある。

第2節では、本論の背景としてチュルク諸語の下位分類を示す。第3節では、多くのチュルク諸語の複数接辞には非複数用法として連合・近似・敬意が見られることを先行研究に基づいて示し、一方で北東語群はこれらの用法を欠くことを指摘する。第4節では、北東語群の複数接辞は因数分解型の等位接続用法のみを持つこと、これらは他の語群に見られる単純並列型の等位接続用法やいわゆる **group inflexion** とは似て非なることを主張する。第5節では、トゥバ語複数接辞に時間副詞用法が存在することを新たに指摘する。第6節では、サハ語の集合対格接辞（複数接辞を含む形式）の時間副詞用法との対照を行う。第7節では、複数マーカーによる等位接続に関する類型論的研究を踏まえた上で、チュルク語複数接辞の通時的変遷に関する仮説を提示する。第8節で本稿の結論をまとめる。

2. 背景：チュルク語の下位分類

チュルク諸語の下位分類には、大別して2種類のものがある。1つは Benzing (1959), Johanson (1998), Johanson (2021: 22-23) のように、北東語群（シベリア語群）を1つにまとめるものである。もう1つは Menges (1959) や Poppe (1965) の

ように、サハ語とドルガン語のみが1つの下位語群をなすという考え方である。庄垣内(1989)も、後者の考え方を妥当だとみなしている¹。

前者の分類でも、さらに小さなグループに分けた場合にはサハ語とドルガン語が1つの下位語群をなすとされる。一方で後者の分類でも、サハ語・ドルガン語に最も近いのはトゥバ語・ハカス語・シオル語等であると見なされている。従って2つの分類方法は、実質的な部分では大きく異なるとは言えないのかもしれない。表1には、代表的な系統分類としてJohansonによるものを示す²。

表1 Johanson (2021) によるチュルク諸語の系統分類

Oghur	北西 (Kipchak)	北東 (Siberian)
Chuvash	NW ^W : Karachay-Balkar, Kumyk, Crimean Tatar, Karaim NW ^N : Tatar, Bashkir NW ^S : Nogay, Kazakh, Karakalpak, Kipchak Uzbek NW ^E : Kyrgyz, South Altay	NE ^N : Sakha, Dolgan NE ^S : Sayan (Tyvan, Tofa), non-Sayan (Khakas, Shor, North Altay, Chulym) NE ^W : Tura, Baraba, Tomsk, Tümen, Ishim, Irtysh, Tobol, Tara
Arghu	南西 (Oghuz)	南東 (Uyghur)
Khalaj	SW ^W : Turkish, Gagauz, Azeri SW ^S : Kashkay, Sonqori, Aynallu, Afshar SW ^E : Turkmen, Khorasan	SE ^W : Uzbek (and its dialects) SE ^E : Uyghur, Yellow Uyghur, Salar

江畑(2022)では、北東語群に属するサハ語・トゥバ語・ハカス語・シオル語に共通する言語特徴を4つ挙げ、一方で4言語のうちサハ語のみが異なる言語特徴は15個にのぼることを示した。単純に数だけを比べると、北東語群のみに共有される特徴は多くはなく、やはりサハ語の特異性が目立つように見える。

この点を踏まえて本稿では、複数接辞の非複数用法が、北東語群とそれ以外とで明確に異なる特徴に加えられるものであると新たに主張する。なお以下の節において、キルギス語、ウズベク語、カザン・タタール語およびチュヴァシ語に関する出典のない情報は、それぞれアクマタリエワ・ジャクシルク氏、日高晋介氏、菱山湧人氏からの御教示によるものである。

3. 複数接辞の非複数用法：連合・近似・敬意

大半のチュルク語には、名詞語幹に付加して累加複数 (additive plural) を表す複数接辞-*ler* (いくつかの異形態を持つ) がある。この複数接辞には、非複数用法もあることが知られている。同音の形式が述語に付加すると行為者の複数性を表すこともあるが、本稿ではあくまで名詞項に付加する複数接辞のみを対象とする。

¹ Schönig (1990) も、サハ語とドルガン語をチュルク諸語の中で特別な位置を占めると考えるものである。またTekin (1991) のように、さらに細かな下位分類を提案する研究もある。

² 表1はJohanson (2021: 22-23) に基づいて筆者が作成したものであるが、言語の名称などをわずかに改めた。

非複数用法の1つに、連合複数 (associative plural) がある。累加複数では同質の構成員のみが含意されるが、連合複数では異なるメンバーが含まれる。例えば、日本語の「会長たち」が会長以外の人を含む場合には連合複数である³。

チュルク語には複数接辞が連合用法を持つものがある。例えばアルタイ語 (南方言) には、次のような例がある (Dedeeva 2016: 40, Nevskaja 2017: 26)。(1)では複数接辞が所有接辞に後続して連合複数を表しているが、逆の形態素順であれば累加複数を表すことになる。

[South Altay]

- (1) *aka-m-lar* 「私の兄とその家族」 (cf. *aka-lar-ïm* 「私の兄たち」)
兄-POSS.1SG-PL

例 (1) と同様の形態素順による連合用法は、トルコ語 (風間 2003: 252), トルクメン語 (竹内・福盛 2012: 18), キルギス語, カザン・タタール語にも見られるという⁴。

連合用法は、人名の場合にも現れる (ここでは人名を仮に「X」と表記する)。人名 (姓) に複数接辞が付加した場合に、「X と仲間たち」を表せる言語と、家族しか表せない言語がある。ただし後者の言語でも、名ならば「X と仲間たち」を表すものがあり、その場合には複数接辞が連合用法を持つものとする。

まず「人名 (姓) + 複数」で「X と仲間たち」が表せるのは、トルコ語 (Göksel and Kerslake 2005: 169), キルギス語, アルタイ語 (Nevskaja 2017: 26) である (すなわち連合用法を持つ)。サラル語 (林蓮云 1985: 36) と西部裕固語 (钟进文 2007: 96) には、フルネームの人名で連合複数を表す例がある。カザフ語 (中嶋 2013: 12) とウイグル語 (竹内 1991: 64) には、人名 (名) に複数接辞が付加して「X と仲間たち」を表す例がある。

一方で「人名 (姓) + 複数」が家族のみを表す言語には、チュヴァシ語, ガガウズ語 (Pokrovskaja 1964: 108), アゼルバイジャン語 (松長 1999: 9), トルクメン語 (Clark 1998: 104) がある。ただしウズベク語では、姓に複数接辞が付加すると家族しか表せないが (Bodrogligeti 2003: 54), 名に複数接辞が付加すると「X と仲間たち」を表せる (中嶋 2015: 16)。菱山湧人氏からの御教示によれば、チュヴァシ語およびカザン・タタール語でも同様に、姓に複数接辞が付加する場合には家族しか表せないが、名の場合にはその限りではないという。Burbiel (2018: 52) も、カザン・タタール語の *Afzal-lar* が ‘Afzal and his entourage’ などの意味を表すという例を挙げている。

³ 「累加」「連合」という用語とその区別については、新永 (2020) を参照した。ただしこれら以外の点においては本稿とは用語法が異なる部分もある。

⁴ 苗东霞 (2019: 268) には *sen-əŋ aça-ŋ-nar* ‘你的哥哥们’ 「君の兄たち」の例があり、例 (1) と同様の形態素順として解釈できるかもしれない。

これに対し北東語群のトゥバ語とサハ語では、姓に複数接辞を付加した場合には家族のみを表し、名に複数接辞を付加した場合には同名の人々を指す⁵。従ってトゥバ語とサハ語は、連合用法を全く持たないと言える。つまり複数接辞が連合用法を持つ言語と、全く持たない言語は、次のように分布している（ガガウズ語とアゼルバイジャン語に関しては、現段階で「全く持たない」か否かを判断できないためどちらにも含めていない）。

[A1] 連合用法あり：トルコ語、キルギス語、アルタイ語、カザン・タタール語、チュヴァシ語、サラル語、西部裕固語、カザフ語、ウズベク語、ウイグル語

[A2] 連合用法なし：トゥバ語、サハ語

2つ目に近似 (approximation) の用法がある。Göksel and Kerslake (2005: 168-169) はトルコ語の複数接辞に関して、(2) のような時間表現や (3) のような場所表現に近似の用法があることを指摘する。これに加えて、複数接辞が数詞語幹に付加した場合には概数を表すことも示している。

[Turkish]

(2) *o tarih-ler-de* ‘around that date’
that date-PL-LOC

(3) *bura-lar-da* ‘around here’
here-PL-LOC

Clark (1998: 105-106) および福盛・竹内・奥 (2023: 35, 116) によれば、近似用法はトルクメン語にも揃っている。Burbiel (2018: 52) によれば、カザン・タタール語では時間表現と場所表現に近似用法が見られる。中嶋 (2013: 12) では、カザフ語の複数接辞が「数詞の後などに付けて概数を表す」用法を持つことを指摘している。ユーラシアセンター (2001: 40) も、キルギス語の概数の例を示している。ウズベク語に関しては中嶋 (2015: 16) が概数の例を示しており、Bodrogligeti (2003: 53-54) に時間表現と場所表現の近似用法が見られる。西部裕固語にも *tohqos sat-lar-da* ‘9点左右」「九時頃に」という例が見られる (苗东霞 2019: 231)。竹内 (1991: 64) ではウイグル語の概数の例が示され、さらに「このはたらきが敬語的表現に利用されるのでしょうか」との説明が続いている。風間・菱山 (2020: 572) には、チュヴァシ語の複数接辞-*sem* にも概数の用法があるという指摘がある。

⁵ サハ語で「Xと仲間たち」を表すにはpropriative接辞-*leex*を用いる：*maayis-taax*「マーユスと仲間たち」。サハ語とトゥバ語には「～一家」を表す後置要素*aax*と*sug*もある：*ežiŋ-im aax / ugba-m sug*「私の姉の一家」。

これに対し北東語群のトゥバ語とサハ語では、時間・場所・概数のいずれに関しても近似用法は見つからない。つまり複数接辞が近似用法を持つ言語と、全く持たないことが確認されている言語は、次のように分布している⁶。

[B1] 近似用法あり：トルコ語（全て）、トルクメン語（全て）、カザン・タタール語（時間・場所）、カザフ語（概数）、キルギス語（場所・概数）、ウズベク語（全て）、西部裕固語（時間）、ウイグル語（概数）、チュヴァシ語（概数）

[B2] 近似用法なし：トゥバ語、サハ語

このうち概数とは、複数接辞が数詞語幹自体に付加する場合だけでなく数詞によって修飾される名詞に付加する場合も含む。これに関連して江畑・Akmatalieva (2022: 18) では、サハ語 *bies inax-tar* 「5頭の牛」やトゥバ語 *beş inek-ter* 「5頭の牛」のような、数詞によって修飾される名詞に複数接辞が付加される例を示している。ただしこれらの言語では、複数接辞が概数を表すわけではない。2以上を表す数詞によって修飾される名詞に複数接辞が付加しうる（概数を表さない）言語と、複数接辞が概数を表しうる言語も、排他的に分布していると言える。

3つ目は敬意用法である。中嶋 (2015: 16) によるウズベク語の例を示す。

[Uzbek]

(4) *buvi-m-lar-ning yosh-lar-i 62-da*
 祖母-POSS.1PL-PL-GEN 年-PL-POSS.3 62-LOC
 「私のお祖母様の御年齢は 62 です」

Kavitskaya (2010: 36) によれば、敬意用法はクリミア・タタール語にもあるという。Burbiel (2018: 53) によれば、カザン・タタール語では敬意に加えて “hyperbole or endearment” 「誇張または愛情」も表せるという⁷。ウイグル語にも先に引用した竹内 (1991: 64) の記述から敬意用法があるようだ。

これに対し北東語群のトゥバ語とサハ語では、複数接辞が敬意を表すことはない。つまり複数接辞が敬意用法を持つ言語と、全く持たないことが確認されている言語は、次のように分布している。

⁶ 査読者からの御教示によれば、カザン・タタール語の複数接辞でも概数用法が、チュヴァシ語の複数接辞でも時間および場所の用法が可能であるという。これら以外の言語でも、先行研究に記述が見られないだけで実際には当該の用法を持っている可能性がある。

⁷ 関連してBodrogligeti (2003: 53) によれば、誇張はウズベク語でも表せる。钟进文 (2007: 96) は西部裕固語の複数接辞の特別な用法として、*Giz-dar* ‘小姑娘’ ‘少女’ (*Giz* ‘姑娘’ ‘女の子’) の例を挙げている。陈宗振・雷选春 (1985: 60) では、*Gəz-dar-lar* ‘小姑娘们’ が可能であることも示されている。

[C1] 敬意用法あり：ウズベク語，クリミア・タタール語，カザン・タタール語，ウイグル語

[C2] 敬意用法なし：トゥバ語，サハ語

管見の限りでは，本節で検討した連合用法・近似用法・敬意用法は，北東語群に属するハカス語やシオル語にも存在しないようである⁸。従って複数接辞が連合用法・近似用法・敬意用法を持たないことは，北東語群のみに共通の特徴の1つに数えられる可能性が極めて高いと言える。

4. 複数接辞の等位接続用法とgroup inflexion

北東語群に属するトゥバ語には，第3節で見た連合複数・近似・敬意の用法は存在しない。けれども本節で示すように，別の非複数用法として等位接続用法が見られる（本節と次節で言語名表記のない例文は，すべてトゥバ語のものである）。

(5) *aleksej =bile andrej monguš-tar*

PSN =INST PSN PSN-PL

「アレクセイ・モンゲーシとアンドレイ・モンゲーシ」

(6) *tīva orus dil-dar-ga biži-p bol-ur*

トゥバ ロシア 語-PL-DAT 書く-CVB なる-AOR

「彼（女）はトゥバ語とロシア語で書ける」

(7) *moskva sanktpeterburg xooray-lar-dan baza kiržikči-ler kel-gen*

PLN PLN 町-PL-ABL も 参加者-PL 来る-PST

「モスクワ市とサンクトペテルブルグ市からも参加者たちが来た」

(8) *ool kis duŋma-lar-lig čora-an =men*

男の子 女の子 下兄弟-PL-PROP 行く-PST=1SG

「私には弟と妹がいました」

[江畑・Akmatalieva (2022: 77)]

トゥバ語の等位接続用法と同様の構造は，同じく北東語群に属するハカス語とサハ語にも見つかる。

⁸ ハカス語はAnderson (1998) およびDoniyorova et al. (2008) による。シオル語はDyrenkova (1941) およびDanijarova et al. (2012) による。Rassadin (1978) を見る限りでは，トファ語にもこれらの用法は存在しないようである。

[Khakas]

- (9) *xakas baza orus til-ler-nej paz-il-kan*
 ハカス と ロシア 語-PL-INST 書く-PASS-PST
 「[それは] ハカス語およびロシア語で書かれている」

[Sakha]

- (10) *illey kem-je kel'n bonn kuorat-tar-ga sirit-ti-bit*
 暇 時-DAT PLN PLN 町-PL-DAT いる-N.PST-1PL
 「私たちは時間のある時にケルン市とボン市を訪れた」

査読者からの御指摘によれば, (5) から (10) のような複数接辞を用いた等位接続構造は, チュルク諸語に広く見られるという。例えば, ウズベク語には *ingliz, rus va o'zbek tillarida* 「英語, ロシア語, ウズベク語で」のような例があり (査読者からの御教示による), キルギス語にも *biškek žana oš šaarlarında* 「ビシュケク市とオシュ市で」のような例がある (アクマタリエワ・ジャクシルク氏からの御教示による)。

キルギス語の複数接辞には, 一見すると (5) から (10) と類似する等位接続用法が存在する。しかし (5) から (10) では「AX と BX」を表すのに「A BX-PL」という構造をなすのに対し, キルギス語の (11) では「A と B」を表すのに「A B-PL」という構造になるという違いがある⁹。

[Kyrgyz]

- (11) *eže-m menen bayke-m-der kel-di*
 姉-POSS.1SG と 兄-POSS.1SG-PL 来る-N.PST:3
 「私の姉と私の兄が来た」

以下では, トゥバ語等の (5) から (10) と同タイプの等位構造を「因数分解型」と, キルギス語の (11) と同タイプの等位構造を「単純並列型」と呼ぶことにする。

サラル語にも, 単純並列型の等位構造が見られる (例文の文法グロスと日本語訳は筆者による追加である。ここでは複数接辞が所有接辞の後に現れている点にも留意されたい)。査読者からの御教示によれば, 他にカザン・タタール語でも

⁹ ラテン語の接語=queも, 単純並列型の等位構造を形成する: *ex patre filioque* 「父と息子から」。韓国語の複数標識-을 (deul) にも, 等位接続用法があるようだ: 김씨, 박씨, 이씨들 세 분이 교수님이예요. 「金氏, 朴氏, 李氏らのお三方が教授です」 (大阪外国語大学朝鮮語研究室 (編) 1986: 732)。崔允 (2018) によれば, 接語 (韓国語学の用語では「依存名詞」) としての複数標識들 (deul) にこの用法が見られるが, 十分な検討がなされていないという (白尚燁氏からのご教示による)。禹吳穎 (2016) では, 韓国の国立国語院『標準国語大辞典』WEB版に依存名詞語の単純並列型等位接続用法 (閉鎖列挙 closed enumerationと呼んでいる) が示されていることが指摘されている: 책상 위에 놓인 공책, 신문, 지갑 들을 가방에 넣다. 「机の上に置かれたノート, 新聞, 財布たちを鞆に入れる」。

単純並列型の等位構造が可能であるという。一方で北東語群の少なくともサハ語とトゥバ語では、単純並列型の等位構造は不可能である。

[Salar]

(12) *u aba-si idza-si-la(r)-nə gor-mif*

他 父親-POSS.3 母親-POSS.3-PL-ACC 見-PST

「他見了他父母亲（彼は父母に会った）」

[林莲云 (1985: 36)]

以上の等位構造は、トルコ語などに広く見られるいわゆる *group inflexion* にも一見類似するが異なるものである。*group inflexion* (風間 (1994) の用語では一括支配型) では両構成要素の複数性が含意されるが、因数分解型あるいは単純並列型の等位構造は構成要素の複数性を含意しないからである。

[Turkish]

(13) *ev ve dükkan-lar-da*

house and shop-PL-LOC

‘in houses and shops’

[Kabak (2007: 335)]

[Kyrgyz]

(14) *kitep depter-ler-di sat-ip al-di-m*

本 ノート-PL-ACC 買う-SEQ 取る-N.PST-1SG

「私は本(複数)とノート(複数)を買った」[江畑・Akmatalieva (2022: 78)]

査読者からの御教示によれば、ウズベク語やバシキール語でも複数接辞による *group inflexion* が可能であるという。Muhamedowa (2016: 223) には、カザフ語の複数接辞による *group inflexion* の例がある(ただし現代カザフ語では、各要素に複数接辞を付加する方が一般的であるとも述べられている)¹⁰。

これらに対し北東語群では、複数接辞による *group inflexion* は見られない。まずトゥバ語では、*group inflexion* そのものは存在する。(15) のように所有接辞や格接辞が後部要素のみに付加されていても、意味的には両構成要素に関与することになる。ただし複数接辞は *group inflexion* 機能を欠いているため、(16) のように両要素に複数接辞を付加する必要がある¹¹。

¹⁰ トルコ語の *group inflexion* については Erdal (2007) にも詳しい。Johanson (2021: 452) にはオスマン語の複数接辞による *group inflexion* の例がある。

¹¹ Kornfilt (1997: 122) ではトルコ語の *group inflexion* について、複数接辞・所有接辞・格接辞を同時に用いる場合にはこれらすべてを前部要素で取り除かなければならないことを指摘している。従ってトゥバ語の (16) のように、複数接辞のみが両要素に付加すると非文になるという。

[Tyvan]

- (15) *üš ool iyi kiz-ım-niñ ara-zı-nda*
 3 息子 2 娘-POSS.1SG-GEN 間-POSS.3-LOC
 「私の3人の息子と2人の娘の中で」 [江畑・Akmatalieva (2022: 77)]

- (16) *baški-lar bolgaš öörenikçi-ler-ge bayır čedir-er*
 先生-PL および 生徒-PL-DAT 祝い 届ける-AOR
 「先生たちと生徒たちにお祝いの言葉を伝える」

サハ語では、複数接辞に限らず **group inflexion** 自体が不可能である（言い換えれば風間 (1994) の用語における分割支配型のみが許される）。

[Sakha]

- (17) *bari doydu-lar-ga uonna kontinen-nar-ga*
 全て 国-PL-DAT と 大陸-PL-DAT
 「すべての国と大陸で」

つまり複数接辞の等位接続用法と複数接辞による **group inflexion** を持つ言語は、次のように分布している。北東語群には、複数接辞による **group inflexion** あるいは単純並列型の等位接続用法が可能ない言語は存在せず、因数分解型の等位接続用法のみが可能である。

[D1] 複数接辞による **group inflexion** が可能：トルコ語，キルギス語，ウズベク語，バシキール語，カザフ語

[D2] 複数接辞による単純並列型の等位接続用法が可能：キルギス語，サラル語，カザン・タタール語

[D3] 複数接辞による因数分解型の等位接続用法のみが可能：サハ語，トゥバ語

次節に移る前に、ウイグル語とサハ語の複数接辞の用法について若干の補足を行っておきたい。

竹内 (1991: 65) は、ウイグル語の複数接辞について以下の2つの例文を挙げて「4人であっても、5人以上であってもいいわけです」「ここに出ていない品物をふくめ、またそれぞれが複数のものであっていいのです」と説明している。この記述が正しければ、ウイグル語では複数接辞による **group inflexion** も単純並列型の等位接続用法も可能であり、さらに開放列挙 (**open enumeration**) も可能だと

いうことになる¹²。いずれにしても、上の [D3] に示した北東語群のみが複数接辞の非複数用法に関して異なる特徴を持つと言える。

[Uyghur]

- (18) *män tursun barat yasin-lar bilän šähär-gä kir-di-m*
 1SG PSN PSN PSN-PL INST 町-DAT 入る-N.PST-1SG
 「わたしはトルスンやバラットやヤスンたちと町に入った」

- (19) *män-dä kitab qalam wä дәptär-lär bar*
 1SG-LOC 本 ペン と ノート-PLある
 「わたしは本やペンやノートなどを持っている」

Nikiforov (1951: 142) は、サハ語に次のような等位構造が存在するとする。ただし筆者が行った母語話者への聞き取り調査においては、この例文は極めて不自然であると判断された。(20) はこれまでに挙げたどの等位構造とも異なるものであり興味深くはあるが、現代サハ語では成立しないものとして論を進める。

[Sakha]

- (20) *ñukuuska-lar žögüör-der ini bii-ler*
 PSN-PL PSN-PL 兄弟-COP.3PL
 「ニコライとイゴールは兄弟だ」

5. トゥバ語複数接辞の時間副詞用法

トゥバ語複数接辞は、さらに時間副詞用法を持つ。この用法では、複数接辞の後に必ず対格接辞を伴い、意味的には累加を表す¹³。ただしコーパス調査では *ert* 「過ごす」など対格支配の動詞と共起する例も多かったため、時間副詞用法であると確実に判断できる例は以下の2つのみである。トゥバ語複数接辞のこの用法は、Isxakov and Pal'mbax (1961), Krueger (1977), Landmann (2017) などの参照文法には記述されていないものである。

¹² 開放列挙 (open enumeration) は禹吳穎 (2016) の用語で、脚注9で触れた閉鎖列挙 (closed enumeration) と対立するものである。

¹³ Göksel and Kerslake (2005: 204) の *pazartesi-leri* 'on Mondays' のような、累加ではなく周期を表す用法とは異なる。なおトルコ語のこの形式は、Lewis (2000: 229) では複数接辞+3人称所有接辞と、Kornfilt (1997: 260-261) では複数接辞+adverbializerと解釈される。

- (21) *buyan düin-ner-ni bezin xün-nüg deg çañna-ar*
 PSN 夜-PL-ACC さえ 太陽-PROP ように 振る舞う-AOR
 「ブヤンは夜も太陽があるように振る舞う」
- (22) *čeže düine-ler-ni udu-vayn igla-p çor =irgi*
 なぜ 夜中-PL-ACC 眠る-NEG:CVB 泣く-CVB 行く =Q
 「なぜ夜中にも眠らずに泣いているのだろうか」

6. サハ語集合対格接辞との対照

サハ語には集合対格と呼ばれる接辞-*leri* があり、歴史的には複数接辞-*ler* と対格接辞-(*n*)*i* に由来するとされる¹⁴。集合対格接辞-*leri* にも時間副詞用法があることから、以下では、前節で述べたトゥバ語の複数接辞+対格接辞の用法との対照を行う。ただし集合対格接辞の用法を見る前に、本節ではまず共格接辞の用法を確認する。共格接辞は、集合対格接辞と部分的に相補的な機能を果たすからである（本節の例文はすべてサハ語のものである）。

共格名詞句は、共同動作主または相互動作主を表す。(23) は必ず「私とヴァーリャが叱った」の意味になり、「ヴァーリャとコスチャが叱られた」とは解釈できない。(24) のように、共格名詞句が2つ以上並列されることもある。加えて (25) や (26) のように、動作主というよりは付帯状況の意味を表す用法もある。

- (23) *valja-lün kostja-ni möx-püt-üm*
 PSN-COM PSN-ACC 叱る-PST-1SG
 「私はヴァーリャと（一緒になって）コスチャを叱った」
- (24) *ava-bi-naan iye-bi-noon miigin zie-ber*
 父-POSS.1SG-COM 母-POSS.1SG-COM 1SG:ACC 家-POSS.1SG:DAT
küüt-el-ler
 待つ-PRS-3PL
 「父も母も私を家で待っている」

¹⁴ 接辞-*leri*はUbrjatova (1950: 132) が “винительно-собирательный падеж” 「集合対格」と呼び、Stachowski and Menz (1998: 429) は “coordinative accusative” と呼んだ。Ubrjatova (1982: 139-140) やSlepcev (2007: 204-205) では、この形式が格の範疇に含まれるのか否かについて諸説あることが紹介されている。結局、パラダイムが完全でない（複数形に付かない、所有形を持たない）ことから、現在の研究では格の範疇には含まれてはいない。Ubrjatova (1950: 133) は集合対格について「複数接辞-*ler*は集合対格接辞の要素として入っているが、この場合は複数ではなく総体性 (совокупность), 集合性 (собирательность) のみを表す」と述べている。

- (25) *küis kulgaax-tün teter-e tüs-püt-e*
 女の子 耳-COM 真っ赤になる-SML AUX-PST-3SG
 「女の子は耳も真っ赤になってしまった」

- (26) *oko-but taņas-tün utuy-but*
 子供-POSS.1PL 服-COM 眠る-R.PST:3SG
 「私たちの子供は服を着たまま眠った」

集合対格接辞-*leri* は、(27) のように随伴目的語に付加される。(28) のように、この接辞が付加した名詞句が 2 つ以上並列されることもある。加えて (29) のように、目的語というよりは累加的意味を表す用法もある。

- (27) *at-i ijür-dari bier-bit-im*
 馬-ACC 鞍-PL:ACC 与える-PST-1SG
 「私は馬を鞍ごと与えた」 [Ubrjatova (1982: 139)]

- (28) *son-noru bergehe-leri ütülük-teri žie-ke xaallar-an*
 コート-PL:ACC 帽子-PL:ACC 手袋-PL:ACC 家-DAT 残す-SEQ
 「コートも帽子も手袋も家に置いて、…」 [Ubrjatova (1982: 139)]

- (29) *uquox-tari iyihün-ni-m*
 骨-PL:ACC 飲み込む-N.PST-1SG
 「私は骨まで飲み込んだ」

集合対格接辞には、時間副詞に付加して累加を表す用法もある。この用法でも、(33) のようにこの接辞が付加した名詞句が 2 つ以上並列されることがある。

- (30) *künüs-teri utuy-ar*
 昼-PL:ACC 眠る-PRS:3SG
 「彼（女）は昼も眠る」 [Ubrjatova (1982: 139)]

- (31) *biyil sayin-nari timnü buol-la*
 今年 夏-PL:ACC 寒い なる-N.PST:3SG
 「今年は夏も寒くなった」

- (32) *tüün-neri ülelii-l-ler*
 夜-PL:ACC 働く-PRS-3PL
 「彼（女）らは夜も働いている」 [Ubrjatova (1982: 139)]

- (33) *kih̄in-nar̄i saȳin-nar̄i biir žie-ke olor-o-but*
 冬-PL:ACC 夏-PL:ACC 1 家-DAT 住む-PRS-1PL
 「私たちは冬も夏も同じ家で暮らします」 [Ubrjatova (1982: 139)]

このように、サハ語の集合対格接辞-*leri* にも時間副詞用法がある。複数接辞と対格接辞が共起してはじめてこの用法を持つ点も、トゥバ語と共通する。ただしトゥバ語では単独で現れて累加的意味を表すのに対し、サハ語では両要素に付加する用法も見られる点が異なっている。

7. 類型論的事実と通時的変遷に関する仮説

本節では、複数接辞の非複数用法（特に等位接続用法）に関する類型論的事実を確認した後、チュルク諸語（特にトゥバ語とサハ語）に見られる非複数用法の通時的変遷に関する現時点での仮説を提示する。

複数接辞の非複数用法に関する類型論的文献には Dixon (2012: 49-51), 新永 (2020), Acquaviva and Daniel (2022) などがあるが、連合複数などを巡る議論には詳しいものの等位接続用法には触れられていない¹⁵。

Corbett (2000: 228-231) には、マンシ語や古典サンスクリット語において2つの双数標示された名詞句が等位接続される例が挙げられている。庄司 (1983) や Wälchli (2009) によれば、ウラル語族には双数接辞や複数接辞を用いた等位接続が広範に見られるという。

以下に庄司 (1983) が引用している多数の例から2つを示す。このうち (35) のように複数接辞が後の名詞にのみ現れるケースについて、庄司 (1983: 456) は「前の名詞から接辞が省略されたと考えるよりむしろ、これが原型に近いもので、この形式から双数、複数の接辞が同一要素として、前の名詞へも移ったと考えることはできないであろうか」と述べている。

[Ostyak (Khanty)]

- (34) *ime-ŋən ike-ŋən ūsŋən*
 女-DU 男-DU
 「女と男がいた」

¹⁵ Haspelmath (2004: 25-26) や Haspelmath (2007: 33-35) などの類型論的研究では、ロシア語の *мы с тобой* 「私と君」のようないわゆる *inclusory construction* もよく取り上げられるが、これも本稿が扱う等位構造とは異なるものである。

[Mordvin]

(35) *a toso pop d'iakon-t mešt' lejnešt'*

牧師 執事-PL

「牧師と執事の馬車に座った」

Erdal (2004: 140) は Old Turkic の group inflexion に関する説明の中で *kānč urī kānč kiz-lar* ‘young boys and young girls’ を含む例を挙げ, “The vision to be seen by each being may here consist of a single boy or girl or of more than one, but is unlikely to consist of a single little boy but a number of little girls; i.e., the suffix +*lar* must apply both to *kiz* and to *urī*.” との説明を加えている (ここでの下線部 “a single boy or girl” は “a single boy and girl” の誤記ではないだろうか。以下では誤記として論を進める)。Erdal (2004: 140) の 1 つ目の解釈 (下線) は単純並列型の等位構造であり, 2 つ目の解釈 (波線) は group inflexion である。

本稿では以上を踏まえて, チュルク語の複数接辞の用法の通時的変遷には以下のような過程があったという仮説を提示する。

①Old Turkic の複数接辞には, 少なくとも group inflexion 用法があった。この段階で単純並列型の等位接続用法も存在したかもしれない。

②現代チュルク語では, group inflexion 用法を保持するものが多い (例えばトルコ語)。キルギス語やサラル語の複数接辞は, 単純並列型の等位接続用法を獲得した。他方で北東語群では, 複数接辞の group inflexion 用法が失われた。サハ語では, group inflexion 用法そのものが消失した (この点では分割支配型のツングース諸語からの影響があった蓋然性も高い)。

③北東語群以外では, 連合用法・近似用法・敬意用法にも複数接辞の機能が広がった。しかし北東語群では, そのような拡張は起こらなかった。

④北東語群の少なくともトゥバ語とサハ語では, 「複数接辞+対格接辞」による時間副詞用法が生じた。トゥバ語では累加的な意味を表すのみだが, サハ語ではこれを並列する用法も加わった。

⑤サハ語の「複数接辞+対格接辞」は, 時間副詞だけでなく動作対象にも用法が拡張した。単独で現れて累加的意味を表すもの (トゥバ語にも存在する) から, 両要素に付加する用法 (サハ語にのみ存在) が生じたのではないだろうか。結果として, 共格接辞の用法と相補的な分布を示すことになった (現在では集合対格接辞と呼ばれる形式に発展した)。

8. まとめ

本稿では, チュルク語複数接辞の非複数用法に着目した。大半のチュルク語には連合用法・近似用法・敬意用法が存在するが, 北東語群には見られない。キルギス語等の複数接辞は単純並列型の等位接続用法を持ち, トルコ語等では複数接

辞による *group inflexion* が可能である。一方で北東語群の複数接辞は、単純並列型の等位接続用法も *group inflexion* も不可能である。

一方でトゥバ語の複数接辞には、時間副詞用法が見られる。この用法では対格接辞が後続する点が、同じく時間副詞用法を持つサハ語の集合対格接辞（歴史的に複数接辞＋対格接辞に由来するとされる）との類似を示す。

複数接辞におけるこれらの用法の有無が北東語群とそれ以外で対照的であることから、複数接辞の非複数用法の分布は、北東語群とそれ以外を区別する特徴の1つに数えられる。最後に、複数マーカによる等位接続に関する類型論的研究を踏まえて、チュルク語複数接辞の通時的変遷に関する仮説を提示した。

本稿の対象言語のうち、筆者自らが十分なフィールドワークを行ったサハ語とトゥバ語を除けば、先行研究の記述を情報源とする部分が多い。特にある用法が存在しないことを証明するためには文献資料のみからは不可能である。従って今後も、各言語の状況を詳しく調べる必要がある¹⁶。

略語一覧

ABL: 奪格, ACC: 対格, AOR: アオリスト, AUX: 補助動詞, COM: 共格, COP: コピュラ, DU: 双数, CVB: 連結副動詞, DAT: 与格, GEN: 属格, INST: 具格, LOC: 処格, NEG: 否定, N.PST: 近過去, PASS: 受身, PL: 複数, PLN: 地名, POSS: 所有接辞, PROP: *propriative*, PRS: 現在, PSN: 人名, PST: (遠) 過去, Q: 疑問, R.PST: 結果過去, SEQ: 継起副動詞, SG: 単数, SML: 同時副動詞

参 考 文 献

- Anderson, Gregory David. 1998. *Xakas*. München: Lincom Europa.
- Anderson, Gregory D. and K. David Harrison. 1999. *Tyvan*. München: Lincom Europa.
- Acquaviva, Paolo and Michael Daniel (eds.). 2022. *Number in the World's Languages: A Comparative Handbook*. Berlin/Boston: Mouton de Gruyter.
- Benzing, Johannes. 1959. "Classification of the Turkic languages". In Jean Deny, et al. (eds.). *Philologiae Turcicae Fundamenta I*. Wiesbaden: Franz Steiner. pp.1–5.
- Bodrogligeti, András J. E.. 2003. *An academic grammar of Modern Literary Uzbek*. München: Lincom Europa.
- Burbiel, Gustav. 2018. *Tatar grammar. A Grammar of the Contemporary Tatar Literary Language*. Stockholm/Moscow: Institute for Bible Translation.
- Clark, Larry. 1998. *Turkmen reference grammar*. Wiesbaden: Harrassowitz.
- Corbett, Greville G.. 2000. *Number*. Cambridge: Cambridge University Press.

¹⁶ 2023年11月にアクマタリエワ・ジャクシルク氏の協力を得てアルタイ語（南方言）の話者に対して行った予備的なオンライン調査では、アルタイ語（南方言）の複数接辞の用法は文献資料から確認できた情報とは異なり、北東語群の言語との類似を示す結果となった。引き続き文献資料とインタビュー調査の両面から、各言語の状況をより正確に見極めたい。

- Daniyarova, Saodat, Shodiyor Daniyarov and Barchinoy Daniyarova. 2012. *Parlons shor*. Paris: L'Harmattan.
- Dedeeva, V.S.. 2016. *Uroki altajskogo razgovornogo jazyka*. Gorno-Altajsk: Gorno-Altajskaja tipografija.
- Dixon, R.M.W.. 2012. *Basic linguistic theory vol.3: Further grammatical topics*. Oxford: Oxford University Press.
- Doniyorova, Saodat, Djamila Arzikulova, and Chodiyor Doniyorov. 2008. *Parlons khakas*. Paris: L'Harmattan.
- Dyrenkova, N.P.. 1941. *Grammatika šorskogo jazyka*. Moskva/Leningrad: Nauka.
- Erdal, Marcel. 2004. *A grammar of Old Turkic*. Leiden/Boston: Brill.
- . 2007. “Group inflexion, morphological ellipsis, affix suspension, clitic sharing”. In M.M. Jocelyne Fernandez-Vest (ed.). *Combat pour les langues du monde*. Paris: L'Harmattan. pp.177–189.
- Göksel, Asli and Celia Kerslake. 2005. *Turkish. A comprehensive grammar*. London/New York: Routledge.
- Haspelmath, Martin. 2004. “Coordinating constructions: An overview”. In Martin Haspelmath (ed.). *Coordinating constructions*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins. pp.3–39.
- . 2007. “Coordination”. In Timothy Shopen (ed.). *Language typology and syntactic description. Volume 2: Complex constructions* [2nd Edition]. Cambridge: Cambridge University Press. pp.1–51.
- Isxakov, F.G. and A.A. Pal'mbax. 1961. *Grammatika tuvinskogo jazyka. Fonetika i morfologija*. Moskva: Izdatel'stvo Vostočnoj Literatury.
- Johanson, Lars. 2021. *Turkic*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Kabak, Barış. 2007. “Turkish suspended affixation”. *Linguistics*. vol.45(2). pp.311–347.
- Kavitskaya, Darya. 2010. *Crimean Tatar*. München: Lincom Europa.
- Kornfilt, Jaklin. 1997. *Turkish*. New York: Routledge.
- Krueger, John R.. 1977. *Tuvan manual*. Bloomington: Indiana University.
- Landmann, Angelika. 2017. *Tyvanisch. Kurzgrammatik*. Wiesbaden: Harrassowitz.
- Lewis, Geoffrey. 2000. *Turkish grammar* [2nd edition]. Oxford: Oxford University Press.
- Menges, K.H.. 1959. “Classification of the Turkic languages”. In Jean Deny, et al. (eds.). *Philologiae Turcicae Fundamenta I*. Wiesbaden: Franz Steiner. pp.5–8.
- Muhamedowa, Raihan. 2016. *Kazakh: A comprehensive grammar*. London: Routledge.
- Nevskaja, I.A., et al. (eds.). 2017. *Grammatika sovremennogo altajskogo jazyka. Morfologija*. Gorno-Altajsk: NII Altaistiki.
- Nikiforov, G.A.. 1951. “O značenijax affiksa -LAR v jakutskom jazyke”. *Tjurkologičeskij sbornik*. vol.1. pp.136–142.
- Pokrovskaja, L.A.. 1964. *Grammatika gagauzskogo jazyka. Fonetika i morfologija*. Moskva: Nauka.
- Poppe, Nicholas. 1965. *Introduction to Altaic linguistics*. Wiesbaden: Harrassowitz.
- Rassadin, V.I.. 1978. *Morfologija tofalarskogo jazyka v sravnitel'nom osveščanii*. Moskva: Nauka.
- Schönig, Claus. 1990. “Classification problems of Yakut”. In Rémy Dor (ed.). *L'Asie centrale et ses voisins*. pp.91–102.
- . 1999. “The internal division of modern Turkic and its historical implications”. *Acta Orientalia Academiae Scientiarum Hungaricae*. vol.52(1). pp.63–95.
- Slepcev, P.A.. 2007. *Саха тылын историята* [サハ語の歴史]. D'okuuskaj: SGU.
- Stachowski, Marek and Astrid Menz. 1998. “Yakut”. In Johanson, Lars and Csató, Éva Ágnes (eds.). *The Turkic languages*. London: Routledge. pp.417–433.
- Tekin, Talat. 1991. “A new classification of the Turkic languages”. *Türk Dilleri Araştırmaları*. vol.1. pp.518.
- Ubrjatova, E.I.. 1950. *Issledovanija po sintaksisu jakutskogo jazyka. I Prostoe predloženie*. Moskva/Leningrad: Nauka.
- Ubrjatova, E.I., et al. (eds.). 1982. *Grammatika sovremennogo jakutskogo literaturnogo jazyka. Fonetika i morfologija*. Moskva: Nauka.
- Wälchli, Bernhard. 2009. *Co-compounds and natural coordination*. Oxford: Oxford University Press.
- Xaritonov, L.N.. 1947. *Sovremennyj jakutskij jazyk*. Jakutsk: Gosizdat JaASSR.
- 禹吳穎. 2016. 「韓国語における複数標識ulの出現環境について — “economy of language”と関連づけて—」. 『人文』第14号. pp.33–58.

- 江畑冬生. 2022. 「チュルク語北東語群の接辞頭子音交替」. 『北方言語研究』第12号. pp.69–81.
- 江畑冬生・Akmatalieva, Jakshylyk. 2022. 『サハ語・トゥバ語・キルギス語の文法対照』. 新潟大学人文学部・アジア連携研究センター.
- 大阪外国語大学朝鮮語研究室(編). 1986. 『朝鮮語大辞典』. 角川書店.
- 風間伸次郎. 1994. 『ナーナイ語の「一致」について』. 北海道大学文学部言語学研究室.
- . 2003. 「アルタイ諸言語の3グループ(チュルク, モンゴル, ツングース), 及び朝鮮語, 日本語の文法は本当に似ているのか 一対照文法の試み—」. アレキサンダー ボビン・長田俊樹(編). 『日本語系統論の現在』. 国際日本文化研究センター. pp.249–340.
- 風間伸次郎・菱山湧人. 2020. 『アルタイ言語文化論集1 チュヴァシ語の言語と文化1』. 東京外国語大学.
- 庄垣内正弘. 1989. 「チュルク諸語」. 亀井孝・河野六郎・千野栄一(編). 『言語学大辞典 第2巻』. 三省堂. pp.937–950.
- 庄司博史. 1983. 「ウラル語族における等位表現の類型」. 『国立民族学博物館研究報告』8巻2号. pp.424–488.
- 竹内和夫. 1991. 『現代ウイグル語四週間』. 大学書林.
- 竹内和夫・福盛貴弘. 2012. 『トルクメン語入門 —キリル文字編—』. 大東文化大学外国語学部日本語学科福盛研究室.
- 中嶋善輝. 2013. 『カザフ語文法読本』. 大学書林.
- . 2015. 『簡明ウズベク語文法』. 大阪大学出版会.
- 新永悠人. 2020. 「北琉球奄美大島湯湾方言の名詞・代名詞複数形の機能とその通言語的な位置づけ」. 『言語研究』第157号. pp.71–112.
- 福盛貴弘・竹内和夫・奥真裕. 2023. 『トルクメン語入門テキスト』. 大東文化大学語学教育研究所.
- 松長昭. 1999. 『アゼルバイジャン語文法入門』. 大学書林.
- ユーラシアセンター(編). 2001. 『キルギス語入門』. ベスト社.
- 崔允. 2018. 「韓国語 複数標識 ‘들’에 對한 考察 —依存名詞 ‘들’을 中心으로—」. 『語文研究』第46巻第4号. pp.91–117.
- 陈宗振・雷选春. 1985. 『西部裕固语简志』. 民族出版社.
- 林蓬云. 1985. 『撒拉语简志』. 民族出版社.
- 苗东霞. 2019. 『甘肃南西部裕固语』. 商务印书馆.
- 钟进文. 2007. 『西部裕固语描写研究』. 民族出版社.